岐阜新聞真学塾

出題 螢雪ゼミナール 大垣駅前校・築樋拓真

問題【国語】
次の(1)から(3)の和歌と漢詩は学問の神様として知られるある人物によって書かれたものです。後の問に答えましょう。

(1)美しや　紅の色なる　□の花　あこが顔にも　つけたくぞある

(2)月　耀　如　晴　雪
□　花　似　照　星
可　憐　金　鏡　転
庭　上　玉　房　馨

(3)東風吹かば　匂いおこせよ　□の花
主なしとて　春を忘るな

問一　(1)から(3)の和歌と漢詩を書いた学問の神様として知られる人物の名前を答えましょう。

問二　□のなかに共通して入る植物の名前を書きましょう。

豆知識 雑学コラム

道真と梅 深い関係

大学入試センター試験まで約一カ月。この季節、学問の神様・菅原道真がまつられている「天神様」で合格祈願したという受験生の話も耳にします。

菅原道真について、さぞ賢い人物だったのだろうということは想像できます。また、天神様の社紋は「梅」です。今回は、道真と梅との深い関わりについて、道真が詠んだ和歌と漢詩からひもといてみましょう。

まず(1)は、道真が5歳の詠んだといわれている和歌で、「かわいらしい紅色をした梅の花びらをあこ（道真の幼名）の頬にもつけてみたいな」という意味です。(2)は、道真が11歳の時に詠んだ漢詩で「月の輝きは晴れた日の雪のようで、梅の花は輝く星に似ている。なんときれいなのだろう。金色の鏡のような月が動くにつれて庭では玉のように見える白い梅の花の香っている」という意味です。5歳で和歌を、11歳で漢詩を詠むなんて、菅原道真はすごい文才の持ち主だとは思いませんか？　また、この和歌と漢詩に共通して梅が出てくることから、道真にとって梅は幼いころから身近にあり、大切な存在であったこともわかります。

そんな道真と梅にも別れの時が来ました。901年、藤原時平の策略によって京都から追い出され、九州の太宰府に左遷されることになりました。この時、屋敷の庭にあった梅に向かって詠んだ辞世の句が(3)です。「春の風が吹いたら、その風に乗せて匂いを送ってよこせ、梅の花。主がいないといっても春を忘れるな」という意味です。人生最初の和歌、漢詩、そして人生最後の和歌に梅が出てくるとは、道真の梅への特別な思いの強さが感じられます。この後、この和歌に詠まれた梅が、道真の後を追って空を飛んで太宰府に行ったという「飛梅伝説」があり、今も太宰府天満宮にはその飛んできたと言い伝えられる梅が残っています。また、高山市にある飛騨天満宮には、この「飛び梅」の子孫である二つの梅が植えられています。

道真が太宰府で死んだ後、京で災害が多発したことで「道真のたたりだ」と恐れられたため、道真を祭るための天満宮がつくられました。飛騨天満宮のほかにも県内には多くの天満宮や天神神社があります。天神様に参拝した時には、菅原道真と梅に思いをはせてみてください。

【解答】　問一　菅原道真　　問二　梅